

L. トーマ「悪童物語」の人物像

古 賀 保 夫

I

生真面目すぎて、とかく重苦しい作品の多いドイツ文学作品の中で、野性的かつユーモアに富みながら、俗物をその一挙手一投足の姿に捉えて蔑視し、鋭い時代批評を加え、官僚、法律家、小市民、教師に手きびしい刃を向けた作家にトーマ Ludwig Thoma (1867～1921) がある。Thoma の作品になった題材は郷土に関するものが多く、この点で相似ているのには G. ハウプトマン Gerhart Hauptmann の兄 C. ハウプトマン Carl Hauptmann (1858～1921), K. シェーンヘル Karl Schönherr (1867～1942) がある。C. ハウプトマンは自然主義から出発し、神秘的傾向に転じ、K. シェーンヘルは郷里チロル地方の農民の生活を取り上げ、農民不滅の力を謳った。

Thoma は郷里バイエルン地方の農村を土台にした。しかし、これは意識的に郷土芸術運動を推進したとは思えない。一つの型に鑄られた文芸運動でなく、むしろ一つの流派には超然として自分の道を歩いた。生まれは南独 Bayern 州 Oberammergau。林務官を父としたが、7歳のとき父を失い、以後母親の手で育てられ小学校時代には親類の後援によったという位だから、生活は決して楽ではなかったのが分かる。Landshut の高等学校を終え Aschaffenburg で林学の勉強をしていたが、林務には不適と考え弁護士の道に転じ、Erlangen と München で法律学を修めた。弁護士として Dachau に住み、その傍ら文筆にいそしみ、そこで農民の生活を描き写した。そうして農民小説集 Agricola (Bauerngeschichten 1897) を発表して文筆家として認められ、1899年からは弁護士を廃業、

München に定住し、筆一本の生活に入った。

München では風刺週刊誌 „Simplizissimus“ の編集に当たり、Peter Schlemil のペンネームでユーモアの中に世情を捉えた喜劇を発表、また Bayern の寒村 Tegernsee で歿するまで詩作にも打ち込んだ。作品は南独的な線の太さと郷土 Bayern 方言を駆使しながら諧謔を織り混ぜた文脈にあふれている。作品の行間には奔放ながら巧妙な会話を挿さみ、人を笑わせながら人生の機微にふれ、しかも俗物を痛切に揶揄しながらも人間的な同情を注いでいる。ただ登場する人間の間が Bayern 地方に限られているため地方的、特殊なものとなっているのは否めない。

しかし、その地方の愚劣さ、反動性を巧みに突いているのが Thoma の筆の特長であり、そこにその内容にも価値が見出されてくる。「アンドレーアス・フェスト」 Andreas Vöst, 「男やもめ」 Der Wittiber, 「道德」 Moral, 「ローカル線」 Die Lokalbahn, 「悪童物語」 Lausbubengeschichten などに映し出されている人物にそれが取り上げられ、中でも Lausbubengeschichten (1905) は少年の眼から大人の世界の偏狭・固陋を適確に捉えており、いまなお読者を失っていない。

悪童物語は当初 „Lausbubengeschichten, aus meiner Jugendzeit“
(注1)
 として12篇が一冊にまとめられ、ついで続篇 „Neue Lausbubengeschichten“
(注2)
 6篇が刊行された。

この「悪童」の名は筆者 Thoma と同名のルードウィヒ Ludwig。正邪を見破る力を具備している。そうして俎上に上るのは優しい母、姉、親類の者、隣近所の小市民、宗教家、学校教師、保護者、役人、学友などである。この登場人物は「悪童」の家庭、学友を除けば殆んどがいわば地方的な知識層である。ドイツにおいて、教員、官僚、法律家が、いわゆるマンドリン Mandarin であり、精神貴族であったのからみても、これらの諸人物は、かかるドイツの地方的表現であり、逆に、これら人物はプロシヤ的・ドイツ的表現であったと見られよう。そこに作者 Thoma は我慢ならぬ愚劣なものを見てとっていたのである。拡大すれば当時の知的生産者の俗臭、閉鎖性、二重人格性の指弾表出である。

悪童 Ludwig は、そうした周囲の人々に対し偽りのない態度で対するが、その周辺の出来事、その日常性には、今日なお、われわれを取り巻く世界に見られる光景であり、人物もそっくり現在に移しかえても生きてくるほど巧みに筆を運んでいる。

そこで繰りひろげられる俗悪世界、虚栄の姿、偽善的人物は小さな世界の動きながら、これを拡大した場合、それなりに普遍化されるものを有している。

そして「悪童」はこの俗悪社会への Protest 的な人物と見なされる得るだろう。著者 Thoma が生きた時代を考えると、彼が物心ついた4歳のとき普仏戦争（1870～71）がプロシヤの勝利に帰し、そのあと泡沫社会氾濫時代 Gründerzeit が訪れている。戦勝に酔いしれてくるにつれ、ドイツの中ではニーチェ的表現を借りれば「教養ある俗物」Bildungsphilister が輩出した。内容と形式は相伴わず、野蛮 Barbarei を文化と思い違えた連中が続出していたのである。

一見すると繁栄の世ながらその底は浅く、真正文化を身につけ得ぬ連中が一流人物と自己錯覚したような世界であったのだ。これに対する少年の抗議的言動、俗人への蔑視はまことに時代と人物に対する鋭い批判であったとも言い得よう。それに父の早逝は Thoma が父と山奥で暮した幼年時代の想いを強め年齢を重ねるに従い、ますます新鮮に蘇って来たことさえ考えられる。汚れを知らぬ幼少年期の Thoma は、悪童を通して彼の人間観を映しており、これが俗悪世界に対する清涼剤ともなっている。

（注1）

Gretchen Vollbeck, Meine erste Liebe, Der Meineid
Onkel Franz, Der Kindlein, In der Ferien
Die Verlobung, Die Vermählung, Das Baby
Gute Vorsätze, Der vornehme Knabe, Besserung

（注2）

Tante Frieda, Die Indianerin, Franz und Cora
Coras Abreise, Hauptmann Semmelmeier

II

「悪童物語」の第一篇 Gretchen Vollbeck「グレート・ヘンフォルベック」は顧問官 Vollbeck 家の動静から始まる。そこには16歳になる娘の Gretchen をめぐる両親の虚栄がある。Gretchen について友人連は「利口ぶっているだけの嘔き気を催さず馬鹿娘」eine ekelhafte Gaus, die sich bloß gescheit mache と言い, Ludwig は「頭に下らぬことを詰め込んでいる娘」 sich den Kopf mit allem möglichen Zeug vollpfropfe と見ている。ところが悪童の母親は Ludwig に, この娘を手本にするようにと言い聞かせて, 彼女と交際するようにすすめ, 母子は Vollbeck 家を訪ねる。

顧問官の細君は娘が地質学 Geologie を勉強していることを得意そうに話すが, Geologie を Scheologie と間違えても得々としている。そこで悪童は, それを訂正すると Vollbeck は言下に「僕のころにはScheologieと言ってもよかった」とふざけた言い訳をして逃げる。いかにも物知りを得意とし, それを逃げ口上に使うプチブルの根性とその一家のあり方を露呈する。それに相応して娘は勿体ぶって「鼻を上につき出している」 die Nase in die Luft hielt のである。

母は Ludwig と Gretchen との交際を懇願するが Vollbeck 氏は Ludwig の成績を「相当ひどい」とけなす。かくて悪童少年は俄然挑戦的になる。一方, 娘は少年の母親にラテン語を浴びせ困らせる。意気消沈した母を見て悪童に母をいとおしむ心が喚起される。話はここで終るが, 少なくとも Vollbeck という小役人の家庭に見る地方の名士的存在の実体が, いかに非文化的であり, 自己偽満の中にあるかを映してくれる。

Meine erste Liebe「ぼくの初恋」では家の管理人フォン・ルップ von Rupp 氏の14歳の娘に宛てた恋文にまつわる人間を観察している。娘の母親 Rupp 夫人は「上品なレディ」noble Dame で, それも「非常な」「ものすごい」furchtbarな「上品さ」で, つとめて標準語で話そうとする。そのために発音するときには「口をとがらす」 machte einen spitzigen

Mund この何でもないような態度の中に無理に上品を示そうとす心を片隅に押し込ませている人間を描写しており、乙に取り済ました中年の女を思い浮かばせる。世の政治経済、社会一般の動向とは全く別な社会、それも自己を中心とする円形の中に安住し、自分だけの平和の中に暮らし、その中で自己の高級性を自認する女性像である。自分の町村、隣近所が全世界であり、その閉鎖的共同体の中での「一流夫人」の姿である。これは Gemeinschaft に見る人間の心の限界であろう。

だから悪童少年に向かっては、些細な点だけを注意しては満足する、道徳のお説教者なのだ。その娘が美人で、悪童は彼女に恋文を認め、それを教科書の「ガリア戦記」の中に挟んで登校する。ところが教室で不意に「先を読め」と当てられ、あわてふためいてページをめくるから手紙が落ちて恋文がバレる。あいにくのこと、校長はその娘の父親と知己であったことも手伝って悪童を「恥ずべき不良」とののしる。いかにも事大主義的な人物が校長となっているかが分かる。また地方の有力者と学校々長との結帯が示されている。その校長は倫理道德観では、いわばリゴリズムを信奉しており、地方権力とは同次元にある。

ところで、この校長は笑うときは「二本の黄色い歯」 zwei gelben Stockzähne を見せる。この不潔な感じを人に与える歯が田舎紳士を象徴しており、この校長と娘の母の描写により田舎町の人間模様が推測されてくる。かかる社会では、一見平和な人間関係に、アンダーカレントとして陰湿さがつきまとう。少年は恋文を書いた罰として八時間の監禁を食う。そのあと Rupp 氏宅を訪れると管理人は「ぼくは平気だが家内がネー」 Es liegt mir ja gar nichts daran, aber meine Frau. と言って葉巻を差し出してくれる。ここにはむしろ救いがあるが、恋文をめくり悪童の言い訳が通らず「嘘をつくのは生徒である」と決めてかかる上級者に対する少年の心が、大人への、それも権力的人間への反抗となることが読む人の心を動かしてくる作である。一見、何でもないような権力が人間を愚鈍にした結果を言い現わしているといえよう。さらにはいわゆるドイツ的な über alles が生む人間の性格、その暗さのマイナス面が語られもいる。

この作品と相似たのに Der Meineid「偽誓」がある。遊び友達のハインリヒを歯が折れるほど投げとばしたあと、校長官舎にとじこめられたりする。そして終業式の日陳列する画を置いた部屋の窓を目がけて投石する。それが少年悪童の仕業と分かる。少年はしかし白状しない。少年は追及される。

„Nun frage ich dich vor diesen brennenden Lichtern. Du kennst die schrecklichen Folgen des Meineides vom Regionsunterrichte. Ich frage dich: „Hast du den Stein hereingeworfen? Ja——oder nein?“ (Der Meineid S. 21)

この燃えている灯火の前でお前に尋ねよう。お前は宗教講義で偽誓の怖ろしい結果を知っているのだよ。だから尋ねるのだ。お前はこの石を投げ込んだのかどうかだ。イエースかノーか、どちらだ。

こう訊問されても白状しない。それというのも白状したからといって悪童少年 Ludwig にとって「立場は少しも好転しない」からである。その判断は結末で「僕はそんなに馬鹿じゃない」 Aber ich bin nicht so dumm. とつぶやくことで示されるが、この一言には自己の立場と学校のあり方、教師に対する憤まんがある。^(注1)

格長が説教、訓戒するときに宗教を持ち出しているのも際立った人物観となってくる。少年にとって宗教はあまりにも清らかであること、また大人は、よく宗教的思想を宣し、それを日常語としても、実行できるものではないことを悪童は見てとっており、だから逆に宗教的訓育の無力を笑っているのであろう。同時に、干からびた宗教を持ち出すことによって、そこに自分のズルさ、小賢こさを隠そうとする人間エゴを感じている。だから悪童は嘘と知りながらも「宗教を口にする」大人自体の偽善に反発し、ために「偽誓」を通した、と測れば、この偽誓は筋が通る。偽善的行為をにくんだ作家の面目がうかがわれるところである。

大人と少年との断絶などは、こうしたところに生成する。既成の型にはまった人物の校長に対する人間と心理の分析が面白く、鋭く出されている小品であるといえよう。

この大人を身勝手な人間と見るのに Onkel Franz「伯父フランツ」がある。学校の宿題を伯父が代って解いてくれる。それがバレてしまう。教師に白状するが、そのとき教師とのやり取りが、つぎのように交わされる。その中では悪童少年を極悪人と決めつけながら、「答」は合っていることに対する逃げ口上が用意されているのを嗅ぎつけている。

„Das war mein Onkel,“ sagte ich, „der hat es gemacht, und ich habe es bloß abgeschrieben.“ (Onkel Franz S. 23)

それは僕の伯父がやったのです。それを僕はただ写しただけなんです。

„Du bist ein gemeiner Lügner,“ sagte er, „und du wirst noch ein Zuchthaus enden.“ (ebd S. 23)

お前は下らぬ嘘つきだ、どの道、刑務所で終るに違いない、と言った。

„Ich habe deine Rechnung noch einmal durchgelesen; sie ist ganz richtig, aber nach einer alten Methode, welche es nicht mehr gibt.“ (ebd S. 23)

お前の計算をもう一度* 目を通した。計算は全く正しいのだが、それは古い計算方法によっているし、そんなのは今はないのだ。

der Kindlein 「をさな子」になれば宗教的、哲学的なものを、さりげない言葉でせせら笑う。宗教の先生 Religionslehrer ファルケンベルク Falkenberg は生徒を「をさ子」Kindlein と呼び子供扱いにすることから、逆に生徒から同一名のニックネームを奉られる。悪童が先生にいたずらすると、先生は学友に向って Ludwig を名指して言う。

„Du bist ein gottesfürchtiger Knabe, und ich glaube, daß du die Lüge verabscheust. Sprich offen, was hat es gegeben?“
(Der Kindlein S. 25)

お前は信心深い少年だよ、お前は嘘を憎んでいると思う。何があったかを包み隠さず言いなさい。

六時間監禁のあと，神の恩寵を口にする。

„Du hast gesündigt, aber es ist dir verziehen....“ (Der Kindlein S.25)

お前は罪を犯したんだ。しかしそれは許されたのだよ。

小柄で肥り気味の宗教教師は，こうした神聖なことを口にするときは「口をとがらせる」。大体，「悪童物語」に出る学校教師はおしなべて口をとがらせ，唾をはき，不衛生な黄色の歯をのぞかせる。また目を細くし，金縁眼鏡をかけている。聖職者，そしてその下品さ。そこには二重人格を自から表明している教師像なのである。「をさな子」教師もこの例に洩れぬ。教師は聖職観を持ち出しているが，悪童にとっては同じ人間にすぎぬ。だからニックネームつけられる。こうしたニックネームのつけ方，それは偽善者，二重人格者を憎みながらも，そこになお，どぎついものがない。学童少年のつける綽名といえ大人の作者が命名する名であってみれば，Thoma はこうした人物に対してもその人物が，自からもその愚俗な中に入らなければ生きて行けないということ，またその中で愚俗さを自己で認めながら，むしろ，それを同化せざるを得ない状況を考慮し，単純に悪玉善玉で人間を割り切っていないのではないだろうか。

さて悪童は宗教の時間に絵具を机に塗りつけ先生の腕になすろうとする。地理の時間には地理担当教師がこれに引っかかる。宗教の教師は，このいたずらから要領よく逃げ，人のいい地理教師がひどい目にあう。そして宗教担当教師が校長とともに現われて生徒に一つのプランを告げる。生徒を「をさな子」と呼称して言う。

„Kindlein, freuet euch! Ich habe eine herrliche Botschaft für euch. Ich habe lange gespart, und jetzt habe ich für unsere geliebte Studienkirche die Statue des heiligen Aloysius gekauft, weil er das Vorbild der studierenden

Jugend ist. “ (Der Kindlein S. 26)

幼児らよ、喜びなさい。お前たちの為になる素晴らしい知らせがある。私は長い間かかって節約し、いま私たちの立派な学校教会のために聖アロイジュスの像を求めた。というのも、この像は若い学生の模範なんだから。

この銅像で生徒が思う通りに動くという目的意識があれば、それは形式主義者、精神主義者の思考であろう。夏目漱石の「坊っちゃん」の狸校長と同類性があるのは、どこにも同じ型の教師、校長が存在するということであろう。

ところでこの像について悪童の学友の父が、「あれは誰も欲しがらなかった肖像で、石屋が無料でくれたのだろう」「それを大金を出したように言うなら、偽善者だ」と教師 der Kindlein をくさす。一種の売名的行為に走る教師の見せかけ道德と、その低級性が暴露されれば連帯性は喪失するほかない。この学友の父というのは格別学問をした人間ではない。にも拘わらず形式主義の偽善を感覚的に見破って、そこに宗教の墮落を直観している。

ここにはハイネが述べよようなドイツ的な惨めささえある。こうしたところでは人間権利の正当さの吟味はなく、あるのは宗教思想の押しつけがある。その証拠に神の恩寵を口にし、信心深くあれと生徒に説明するにすぎぬ。宗教それ自体にメスを入れることはないから、宗教教師はいつも無事平穩である。^(注2)

この像の開幕式前日に像は学内に馬車で運ばれる。この運搬の時には学校全体は整列して迎える。像は四人がかりで聖室に運ばれる。校長にとっては像こそ自己人格の表現なのだ。しかし運搬人にとっては一運搬物にすぎなかったのだから、厳粛と事大主義に憑かれた権威者と、それを半分はくさす人間の対立となってくる。その搬入儀式は神聖観からであり、無料で貰ったのをさも重大行為とした校長の裏を知っている悪童からすれば、これは滑稽である。これは同時に善と悪との境界の違いであろう。

さて悪童は搬入夜、友人と連れ立って聖体安置室目がけて石を投げ窓を

破り、ついでに像の鼻をふっとばす。かくて開幕式当日は大騒ぎになり特務曹長上がりの小使は「この犯人は捕まえる。犯人を射殺するか足を狙ってやる」と切齒する。この人的結合には校長、教師、小使といった絶対主義的主従の垂直線型態がある。特にプロシヤ軍隊生活を経た小使が「小銃で犯人を射殺する」と言うところは、絶対主義時代の軍隊経験者を雇傭して秩序の中に組み入れる方式である。それが学校秩序の維持に必要なだったこと、それは簡単に罰を以て事を処するを可とする管理を覗かせている。かかる雰囲気の中で聖体欠損の騒動が持ち上ったから大変である。

生徒は宗教時間に「怖ろしい罪惡が暴かれるようにとの祈り」を強いられる。それは何の効果もない。かくて「祈り」という形式は無内容、無効果となること、それをセセラ笑う悪童は保守的人物、反動的教育を腹の底で揶揄している。この悪童の姿は、とりも直さず Thoma そのものであるろう。

(注1) Thoma の学校教師、さらには知ったかぶりをした人間に対する反抗、蔑視については、つぎの Thoma 評にもうかがわれる。

..., dann das Wilhelms-Gymnasium in München und zum Schluß die Oberklasse in Landshut, wo ihm trotz seiner Schulnöte 1886 das Absolutorium gelang; vielleicht deshalb, weil seine steigende Renitenz gegen die Lehrer endlich durch das menschliche Verständnis des dortigen Rektors gemildert worden war. Er vertrat weder die lederne Schulmeisterei noch das falsche Pathos, wie sie damals den humanistischen Unterricht beherrschten. (L. Thoma, Gesammelte Werke J. Lachner: Einführung)

(注2)

Der Versuch einer Ausführung dieser Idee hat in der Geschichte unendlich viel herrliche Erscheinungen hervorgebracht, und die Poeten aller Zeiten werden noch lange davon

singen und sagen. Der Versuch, die Idee des Christentums zur Ausführung zu bringen, ist jedoch, wie wir endlich sehen, aufs kläglichste verunglückt, und dieser unglückliche Versuch hat der Menschheit Opfer gekostet, die unberechenbar sind, und trübselige Folge derselben ist unser jetziges soziales Unwohlsein in ganz Europa. Wenn wir noch, wie viele glauben, im Jugendalter der Menschheit leben, so gehörte das Christentum gleichsam zu ihrem überspanntesten Studentenideen, die weit mehr ihrem Herzen als ihrem Verstande Ehre machen.

(Zur Geschichte der Religion: Heines Werke in fünf Bänden, Aufbau Vlg S.67)

Ⅲ

In den Ferien「休暇に」は学校の長い休暇中、隣家・枢密顧問官ビショップ der Geheimrat Bischof との出会いを取り上げている。隣家は避暑に来た一家で、夫人はペットにアンゴラ猫を飼っている。Ludwigはこの猫に目をつけ、尻尾に火を放つなどのいたずらをする。それというのも、この少年の眼には隣の夫人が、猫を人間以上に溺愛する愚劣さに人間的抗議を叩きつけたかったにすぎない。この猫の尻尾に火をつけるというユーモアの裏に小市民安住の境に耽り埋没した人間の俗物性を摘出している。主人公が少年であるため、その突飛的行動が一場の笑いで済ませるあとである。しかし本当は大人の眼で書かれた世界である。

この猫が、少年の尻尾火つけによって家中を突っ走り高価な茶碗を三つ割ったことから、その飼主夫婦が悪童の家に怒鳴り込む。顧問官は怒りを満面に出して責め立てる。いかにも顧問官一官僚の肩書が発言しているかのようである。

„Woinen Sü nur, gute Frau! Woinen Sü über Ühren

mißratenen Sohn!“ (In den Ferien S. 35)

奥さん！ さあ、お泣きなさい。貴女の出来損いの息子のために泣きなさい。

ヒステリーのように金切声を立てるときの言葉は Woinen Sie=Weinen Sie となっている。こうした方言的言い回しは Thoma の作品には多い。例えば「家兎」Königshase が Könighase, 「しゃべる」Schwätzen が Schwätzen (In den Ferien S. 36), また Vielleicht が Vüloicht (ebd S. 33)。さらに三格支配前置詞 mit を使って mit gelbe Handschuhe (Die Indianerin S. 90) と四格支配としている。また非論理的に二重否定を使っているのも多い。nie einen Spaß でよいところを nie Keinen Spaß とし, Keinen Epaminondas nicht とか Keine Freude をわざわざ Keine Freude nicht (Tante Frieda S. 80) と言い変える。

人名にも定冠詞をつけ die Frau von Rupp となったり, 時間的には現在完了を過去の代用として, やたらと使っている。もっともドイツにおける方言観は日本と違うから, さまで取り上げる必要はない, といえそれまでだし, また方言に日本ほど抵抗感覚がないのは地方分権の相違からも考えられよう。とはいえ, Thoma は地方性を濃くするため方言を取り入れ, そうした作風が登場人物の特色を際立たせる効果となっている。

作品の中には地方名士が名を連ねるのが多い。必ず肩書をつけている。これが教養ある俗物を雛壇に並べたような状況となる。美的意識の慢性的な欠如を言葉の中に感じさせる権威主義の代表を, かく名士肩書で表示しているところは, 可笑しさの中に哀れさを含み, Thoma の社会批判を痛烈なものとしている。

In den Ferien では, この肩書名士が, 猫による損害として茶碗三個代金 6 マルクを請求する。少年の眼には, この肩書氏が「下等な人物」gemein なのだ。俗世間に通用する形式と実体との差が大きければ大きいほど, その人物は滑稽なのである。悪童ぶりに顧問官氏はニガ虫を噛みつぶしたようになるが, それを平気でいるのが Ludwig 少年の悪童たるところである。学校に行くと作文を命ぜられる。それが大の苦手。何とかか

とかで2階にある監禁室に入れられる。それを苦ともせず跳び下り、ついでに桃を失敬し、とうとう「学校に来るな」と叱られると、大いに喜び躍び上る。形式主義的学校教育への嫌悪感と、大人のエゴイズムに対する憎しみが溢れている作品である。

Verlobung「婚約」では学校教師と姉の婚約成立をめぐり、義兄と決った教師が、悪童に「この子を社会的に有用な人間に仕立てよう」 Wir wollen ein nützliches Glied der Gesellschaft aus ihm machen. と言うとき、それをしんみり聞くと同時に姉と母を気遣う少年の姿を浮き出させている。Thoma 自身の眼には苦勞して子を育てた母親の姿が焼きついていたに違いない。悪童は心やさしき人に対しては、本当の人間の血を感じているのである。これは Das Baby「赤ん坊」にも引きつがれている。

物語の10作目 Gute Vorsätze「立派な決心」では再び宗教教師が登場する。教師から聖餐会の準備を三週間続けさせられる。これは無理にでも生き方を変えさせる状況の設定であり、この場合は「信心家」になることにある。形の上では祈りとなる。就寝時には「良心の検討」 Gewissens-erforschung に迫られる。金持ちは穏やかになるが、聖餐式が終ると伯母の Frieda が「お前の母は人の上に出ようとしている」 Aber deine Mutter will immer oben hinaus. と嫌味を言う。加えて Fany 伯母もこれと同調することから「立派な決心」はくずれてしまう。母を敵視する同族の伯母を底意地の悪い女としてとりあげている。「人を信心させておかないのは、実際は、かかる俗に墮し切った人間がいるからだ」と悟る。純粋な心は一転して怒りになり Frieda 伯母の家の鏡を空気ピストルで割ってしまう。そこには世に言う賢かさに欠ける少年の姿があるが、これが形式化した聖餐式に対する少年の眼の正しさを示しているといえよう。つけ焼刃の、一日だけの信心の下らなさが、少年の心を反射的に反対の立場に追い込むというわけである。

Thoma は舞台を復活祭とか聖餐式に求めているが、それは人間の裏と表が、かかる場所で典型的に現われるから、それによったのであろう。そ

こで Thoma は悪童の眼を借りては偽善を詰め込んだ既成道徳、一皮むけば欲と偽りに囲まれ、それに同化した人間の下劣さをあざ笑っているのである。

Thoma は、かかる道徳を憎んだ。それは三幕物喜劇「道徳」Moral (1909) で取り上げられている。これはいわゆる上流社会の腐敗と偽善を摘発したともいうべきドラマだが、腹を抱えて倒れそうになる軽妙なユーモアで、その事情をさらりと流しているのは一流品に数えられよう。かかる姿は今日の政治、社会の場にも見られ、かつ聞かれることなのである。現実にはわれわれの眼前に生起している人間像の展示なのである。

悪童少年は漱石の「坊っちゃん」に見る「純粋な人を見ると坊っちゃんだの、小僧だの難癖をつけ軽蔑する。嘘をつくな、正直にしろと教えない方がいい」とあるのと同じ類型の人間である。その大人は「火事が氷って、石が豆腐になる」(坊っちゃん) ような不合理の中に平然と要領よく生きて行く。道徳を叫ぶのに道徳が守れず、権力が権力自体によって腐敗する様相を綴った。これが Thoma の悪童物語の真髄であろう。

IV

裕福な家庭の過保護問題を俎上にのせているのに Der vornehme Knabe「良家の少年」がある。百姓シェック Scheck の家に避暑を兼ねプロイセンから一家がやってくる。一家は村中を一廻りして村長を見下して言う。

„Ich möchte nur wissen, von was diese Leute leben.“

(Vornehme Knabe S. 56)

僕はただ、この連中がどんなものを摂って生活しているかを知りたいものだ。

家庭教師までついている避暑一家の少年 Arthur の家を知るにつけ悪童の母は交際に乗り気である。Arthur は車輪付きの汽船を持っているので一緒に遊ぼうとさそうと、すかさず Arthur の母は

„Du darfst es aber nicht tragen, Arthur. Es ist zu schwer für dich!“

お前はそれを運ぶんじゃないよ，アルトゥール。重すぎるのよ。

と言うので，悪童が持とうとすると父親の方が見下して大声を発する。

„Das ist ein starker Bayer; er ißt alle Tage Lunge und Knödel. Hahaha!“

それは頑丈なバイエルン人なんだ。バイエルン人は毎日肺臓と団子を食べてるんだ。ハッハッハッ！

池での遊びで良家の少年は悪童を命令下におかないと承知しない。ところが事がうまく運ばないと訴える。

„Ich sage es meinem Papa!“... „Du bist schuld; ich sage es meinem Papa.“

それを僕はパパに言ってやる！ お前が悪いんだ，僕はそうパパに言ってやる。

後ろ楯の力で生きる少年は，実はエゴイズムの中にあるということである。自分さえ安泰なら，それで許すという人間形成が，こうしたところに派生しているわけだ。

Besserung「改心」は復活祭休みに帰郷する途中の出来事と，帰宅後の母の心と悪童の心とが重なり合って，悪童が悪童でなくなる筋である。

Thoma は続いて「新悪童物語」Neue Lausbubengeschichten を綴った。これも悪童が主役になっているのは勿論のことで，いずれも前編と同様に嘲笑が渦巻く中にも人間観察が含まれて本当の人間愛が入り混じっている。

Thoma は文学史上では決して主流を占めてはいない。しかし彼の「悪童物語」は，なるほど普遍性に欠けているものの，既成勢力，安隠に日を送る小市民への蔑視の中にもなお同情を注いでおり，また筆致は洗練さに

おいても並のものではないことは認められて然るべきであろう。

肩の凝るようなドイツ文学の中では異色な方法によって、仕組まれた世間の裏舞台を、ある時は正面切って、時に応じ諷刺を利かせて暴露している。笑いつつ核心をつく面がある。

なお Thoma の回想 *Einnerungen* によれば、この作家を陰から支えてくれた Thoma 家の下女 Theres がいる。作家 Thoma が腕白だったころ、いつくしみの心で臨み、目をかけ、ただ Thoma の成長だけを楽しみに Thoma 一家に仕え、一生独身で押し通している。Thoma の回想記 *Erinnerungen* では *Fräulein Viktor Pröbst* という名で示されている。Thoma は30歳ごろ München に引越し一人生活を始めたとき、妹と Viktor を自分の住居から30キロほど離れた田舎に住まわせた。そこでも Viktor は心を Thoma の大成に向けている。この献身的な心は Thoma には忘れられぬ力となっていたこと、それは Viktor の病重きとき、これを見舞い、臨終の場に急ぐ「回想」の中に、実に感動的な筆で画かれている。^(注) この心が悪童物語を書かせた Thoma の心意気にもなっていたのであろうことは、十分に推測できる。

これも漱石「坊っちゃん」の女中の清にも似た存在である。

ただ、ここで考えられることは悪童のような純粹無垢な人間は、人の共感を得るものの、現実生活においてはとかく敗北し易いという点である。不合理な仕組みに対しては、純粹な方法だけで対応しても、それは「坊っちゃん」的な行動と結末に終りがちだ、ということである。力の論理が罷り通る人間関係が存在する条件下では清涼剤を投ずる役割にすぎぬ、ということさえ考えさせられる「物語」である。

(使用原本は R. Piper & Co Vlg. L. Thoma: *Gesammelte Werke, Vierter Band* によった)

(注)

Ich eilte ins Haus und stand erschüttert vor meiner alten Viktor, deren verfallene Züge mir jede Hoffnung nahmen.

Sie lächelte freundlich und streckte mir die Hand entgegen; fast unwillig wies sie meine weinende Schwester zurecht, da Klagen doch keinen Sinn hätten und mir weh tun könnten. Ich setzte mich an den Bettrand, und sie bestand darauf, daß uns Kaffee gebracht würde.

Dann versuchte sie, sich ein wenig aufzurichten, stieß mit mir an und sah mich aus müden, halb erloschenen Augen noch einmal freundlich und voll Güte an.

Sie nickte zufrieden mit dem Kopf, denn nun war's in Ordnung, und das Letzte, was sie gewollt hatte, war geschehen.

Bald darauf verlor sie das Bewußtsein und phantasierte. Am Abend starb sie; die Geschichte von den vorder-risser Tagen war zu Ende erzählt. (Erinnerungen S.194)